

酔筆 (7)

個展を開く <中>

新井 俊郎

年が明けて昭和 63 年(1988 年)になった。淡彩画、水彩画の入門書が溜った。20 冊を超えただろう。これらを読んで描き、描いては読んだ。五里夢中だった。出来が良いのか悪いのかが、自分には全く判らなかつた。どうやら専門家たちは、画を描くための know・how を書こうとはしないなど思った。こんなとき私は府中市の本屋ですばらしい入門書に出会った。

画家の名は網干啓四郎。本の名は『スケッチ・淡彩上達コース』<一週間マスター法>アトリエ出版の本だった。私が買ったのは保存版第7刷 1986 年版。初版は 1982 年で、以来ずいぶん売れたらしい。残念ながらいまは絶版なので神田神保町あたりで求めるしかない。それほどに買う価値のある本である。理由の第一は描くための know・how が惜しげもなく書かれていること。第二は挿入されている画がすばらしいこと。第三には自分の画の良し悪しがわかるようになることである。

私は昭和 63 年(1988 年)の4月に立川の網干教室に入った。このときはすでに 10 ヶ月後に銀座の個展を決めてしまっていたので教室における態度は大変真面目だった。網干さんの言うことは、すべてメモした。いま思うと健気だったが、まさに私にとっては網干大明神だったから、神様の言うことが染入るように伝わってきた。この思い入れは二年続いた。3年目からは描くの役に立つことと、まったく役に立たないことの聞分けが出来るようになった。都合 4 年2ヶ月在籍したが、この間に書き留めたメモは分厚い手帳4冊にのぼった。このメモをヒントにしさえすれば「淡彩酔筆」はいくらでも書ける気がする。

「目くら蛇に怖じず」ということがあるが、個展の期日が迫ってきても予約をキャンセルしようなどとは夢にも思わなかった。色々の友人が色々な助言、忠言をしてくれた。「君の個展じゃ、折詰・二合ピンを案内に書かなきゃあ、誰も来ねえぞ」「酒盛りが出来る画廊を探せ」「個展なんだから作品に値段をつけろ。一点も売れなくなってもいいじゃねえか」「よし、応援してやろう。親戚一同へ檄をとばすよ」「よくまあ、やるもんだなあ。羞恥心の無さと蛮勇には脱帽だ」等々。後の話だが、この脱帽した口の悪い友人は真先に買ってくれた。(つづく)

< 2002/06/

>